

近衛流書体謄本の表記をめぐる

——元和卯月本から明和改正謄本へ——

坂 本 清 恵

一 はじめに

近松門左衛門作『心中天の網島』（享保五年一七二〇）の道行「名残の橋尽くし」に、「謄の本は近衛流、野郎帽子は若紫……」と語られる近衛流書体の謄本は、元和卯月本にはじまり、江戸時代を通じて刊行され続けた。近衛流とは近衛信伊（一五六五―一六一四）に発する書流であり、『萬宝全書』（元禄七年一六九五）所収「本朝古今名公古筆諸流」に「近衛殿流 定家流より出ル」と記述されている。信尹（三藐院）は、藤原定家自筆の熊野懷紙などを模写して定家流を学び、慶長八年（一六〇三）には堀尾吉晴所持の定家筆『下官集』を模写しており、その模刻本が伝存する。こうして定家の書流を受け継ぐとともに、定家仮名遣いも同時に享受したことが判明している。近衛流で揮毫された謄本の仮名遣いは、自然に考えれば定家仮名遣いであると考えられる。しかし、書流、仮名遣い、本文系統の關係について言えば、例えば宮内庁書陵部蔵伝冷泉為綱筆『土左日記』は、定家様で揮毫され、当時通行定家仮名遣いとなっているが、それは定家自身の真正な定家仮名遣いとは異なり、また本文は定家本と異なるものとなっている⁽¹⁾。このように、書流と仮名遣い、本文の

関係は、先入観を排し虚心に調査・検討を行うことが必要となる。

元和卯月本は、表章によれば、石田少左衛門本を底本に、元和六年（一六二〇）卯月から同九年にかけて完成し、家元公認本として寛永卯月本に踏襲され、内百番の大半はこの系統の本が親世流版行謄本の主流を占め、明治にいたったという⁽²⁾。その元和卯月本の復刻本を作り、逐次訂正案の書き込みを施し、改刻を行い完成させたものが、明和改正謄本である⁽³⁾。書流は継承されるが、仮名遣いについては定家仮名遣いに拠らない明和改正謄本が例外的であり、同本以外は明治まで定家仮名遣いが踏襲されていたことになるだろう。

明和改正謄本は、十五世観世大夫元章が詞章を大きく改訂したが、その作業にあたって田安宗武が賀茂真淵に改正を命じ、真淵が加藤枝直に詢っており、当時の国学の影響が大きいといわれる。平仮名部分には発音注記を施し⁽⁵⁾、舌内入声音の発音（ツメル）〈含〉を逐一示すなど⁽⁶⁾、現在の謄本の原型とも言える。仮名遣いについては、漢字の振り仮名を含め、ほぼ所謂「歴史的仮名遣い」に改訂したものとみられる。元和卯月本と明和改正謄本は、ともに近衛流であるが、仮名遣いは大きく異なる。つまり明和改正謄本は、書流と仮名遣いが連動しない事例となるのである。

本稿では、書流を同じくする元和卯月本と明和改正謄本との表記の相違を明らかにする手がかりとして、両本の間に版行され、明和改正謄本の稿本といわれている『爐雪集』『紅爐點雪集』の仮名遣いおよび発音注記を検討し、表記改変がいかになされたのか探る。

二 『爐雪集』『紅爐點雪集』の注記

元和卯月本（以下、元和本）から明和改正謄本（以下、明和本）刊行に至るまでの準備段階の稿本として、落合博志により観世文庫所蔵の『爐雪集 仁』『爐雪集 義』『紅爐點雪集 禮』（以下まとめて稿本）ほか外題なしの一点が紹介されている。落合によれば、これらは明和本の「見本刷」「校正刷」というより、訂正詞章の記入を目的に作られたものであるという。⁽⁸⁾ また、明和本については大森雅子により、甲乙丙の三類が認められている。⁽⁹⁾

本稿では次によって仮名遣いと発音注記を中心とした比較検討を行う。明和本の引用写真は丙類により、引用の曲名も明和本による。

・元和本…『謡曲百番』一～四版本文庫 国書刊行会 一九七

四～八一年

・稿本…『爐雪集 仁・義』『紅爐點雪集 禮』観世文庫（8・1・2・3）

・明和本…甲類 国文学研究資料館本（タ7-6）

乙類 観世文庫本（81-1）

丙類 能楽研究所蔵本（う38-40）

なお、元和本には、稿本、明和本にある『住吉詣』がなく、『紅爐點雪集』では、『須磨源氏』と表紙に記載される。落合によれば、稿本と明和本の『住吉詣』は別本という。⁽¹⁰⁾

稿本の表記に関わる特徴は次のようにまとめられる。

- 1、漢字に片仮名で振り仮名が付される。
 - 2、仮名遣いは振り仮名も含め、定家仮名遣いである。
 - 3、清濁の表記が加えられる。
 - 4、マ行とバ行の交替にかかわる注記がみられる。
 - 5、連声に関わる注記がみられる。
 - 6、ハ行転呼音に関わる発音注記がない。
 - 7、平仮名部分のオ段長音に対する発音注記がない。
 - 8、舌内入声音への「ツメル」〈含〉の注記がほぼない。
- 1345については、稿本段階で、版行されていたものか、書き入れられたものが非常にわかりにくく、さらなる調査が必要であるが、現段階で分かったことを記す。2の仮名遣いについては次章で説明する。

「二」漢字が仮名か

元和本には振り仮名がないが、稿本には、漢字に振り仮名（片仮名）がみられる。これには、版行されたものと書き入れがあり、おそらく『松風』は書き入れと思われ、また一曲の内でも版行と書き入れがある。ただし、稿本と明和本に共通して漢字に振り仮名がないのが、使用頻度の高い丁寧語の「候」「申」である。使用頻度が高いが、尊敬語の「給」には振り仮名がある。なお、明和本には漢字に振り仮名（片仮名）のほかに、ハ行転呼音、オ段長音について、平仮名本文に対して振り仮名（片仮名）の発音注記がみられる。


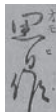
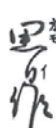

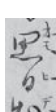
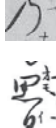
この振り仮名の状況から、稿本では漢字、明和本で平仮名として扱われている①「日」②「見」③「羅」が確認できる。また、漢字

としてではなく、借音④「覧」、借訓⑤「社」として使われる例がみられる。なお、稿本、明和本とも共通して「三井寺」《三井寺》二オ5、「雲井」《蟬麻呂》二オ3のように「井」に振り仮名がなくな、稿本では「井筒」《井筒》六ウ3の「井」の振り仮名「イ」を墨消しし、明和本には「筒」にのみ振り仮名を振り「井」を仮名扱いしている。以下、①⑤の例を確認する。

①「日」と「ひ」

元和本では平仮名「ひ」には、「比」と「日」の字母例がみられる。その使い方にはルールがあり、字母を「日」とする仮名が語頭にくることはなく、もっぱら動詞の活用語尾とその転成語に使われ、多くが「思ひ」を表す場合で、「迷ひ」《蟬麻呂》二ウ1の例もみられる。「思ひ」に関わる例をそれぞれ挙げると以下のとおりである。

「元和本・稿本・明和本」での表記

- 1    《夕顔》一オ6
- 2    《熊野》五ウ6

右のように稿本には「日」に片仮名「ヒ」が振られている。「思日」としたすべてに振り仮名があるのではないが、多くに「ヒ」と振られている。また、さらなる校正により、「ヒ」を墨で消した例が《井筒》《江口》《采女》《源氏供養》《梅枝》《松風》《軒端梅》《蟬麻呂》《二人静》にみられる。これに対して、明和本は「日」に「イ」が

振られて、発音が「ヒ」ではなく「イ」であることを示している。つまりは、稿本版行の段階では「日」を平仮名の字母ではなく、漢字としている。一方で、明和本では、「イ」を振ることにより、「日」を字母とする平仮名として認識し、文字どおりの発音ではないことを注記しているのである。

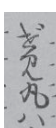
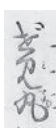


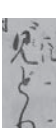

なお、稿本では、「日」を胡粉で消して、上から字母「比」の「ひ」に書き換えたものに《江口》二ウ7・九オ7・十オ5・十オ6・十ウ1がみられる。

江戸時代、字母「日」の仮名使用が減り、字母「比」の仮名が一般的になったことが影響しているであろう。

②「見」と「み」

平仮名「み」の字母「見」は、漢字か仮名かが判断しにくい。「見る」の意味で使用されていれば、くずし方が異なっても漢字として扱うこともあろうが、「見る」の意味でない場合にはどうだろうか。稿本では「見」への「ミ」の振り仮名が多く、「見る」の意味では、そのまま振り仮名が残されるが、それ以外では胡粉や朱で消していることが多い。

「元和本・稿本・明和本」での表記

- 1    《蟬麻呂》九ウ5
- 2    《松風》一ウ5


3  《柏崎》五ウ6

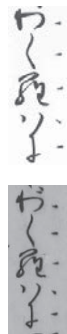
4  《柏崎》十オ3

1は稿本「せ見丸」の「見丸」に振り仮名で「ミマル」としたあと、「ミマロ」に訂正しており、明和本では「せみ丸」と「み」を仮名に扱い、振り仮名はない。稿本では、2は「緑」を「見どり」で、3「悲み」を「悲見」と「見」を漢字とみなして「ミ」を振ってあるが、漢字に朱が入っている。明和本は4の「形見」も「見」には振り仮名がない。明和本では「見る」の意味での振り仮名はほぼ見られないところから、平仮名扱いをしていることがわかる。「見」のくずしは2の語頭とそれ以外で異なる。

③「羅」と「ら」

平仮名「ら」には、字母「良」「羅」がみられる。稿本では「羅」に振り仮名が付けられ、漢字として扱われたとみられる。明和本では字母が「羅」であっても振り仮名はなく、仮名字母として扱っている。


1  《松風》七ウ7

2  《松風》八ウ3

2の稿本の例は、「羅」の振り仮名「ラ」を胡粉で消してある。
④「覧」と「らん」

助動詞「らむ（ん）」については、元和本では漢字表記「覧」の場合が多く、平仮名「らむ」もみられる。「覧」を助動詞「らむ」として用いるのは、和歌を一行で書く場合などにみられ、広く使用されてきた。

「元和本・稿本・明和本」での表記

1  《蟬麻呂》二ウ6

2  《蟬麻呂》三オ2

稿本は元和本の漢字表記を引き継ぎ、振り仮名を付けることが多いが、1は元和本「すてをき申へきやらむ」、稿本「捨置申べき哉覧」で「覧」の左に墨で「らん」の書き入れがある。明和本では「捨置申べきやらん」である。稿本の段階では「すてをき」も「らむ」も漢字に改めており、助動詞「らむ」を漢字で表記する意識があったか。《三井寺》六ウ2では、元和本「秀郷と哉覧」、稿本「秀郷と哉覧（左に「らん）」、明和本「秀郷とやらん」で稿本は元和本を引き継いでいる。2の稿本にも「覧」の右に墨で「らん」の書き入れがある。この他、《芭蕉》七オ6では、元和本「おほす覧」で、

稿本は「おぼす覧」にさらに朱で「らん」の書き入れがあり、明和本では朱を採用した「おぼすらん」である。

⑤「社」と「こそ」

助詞の「こそ」は多くが平仮名表記であるが、「社」で示されることがある。

1 「和泉式部と社」元和本、「和泉式部と社」稿本・明和本《軒端梅》二オ5

2 「わらふこそ」元和本、「笑ふ社」稿本・明和本《蟬麻呂》六ウ3

3 「田鶴社は」元和本、「田鶴社は」稿本、「鶴こそは」明和本《松風》四オ7

4 「御痛はしうこそ候へ」元和本、「御痛はしうこそ候へ」稿本、「御痛しう社候へ」明和本《楊貴妃》五オ5

5 「たち寄てこそ候へ」元和本、「たち寄てこそ候へ」稿本、「たち寄て社候へ」明和本《定家葛》二オ6

1 は元和本から漢字で稿本、明和本には漢字に振り仮名、2 は元和本は平仮名で、稿本と明和本は「笑ふ」も漢字に直したうえで、「社」も漢字に振り仮名、3 は元和本と稿本が漢字で、明和本が平仮名、4・5 は明和本のみが漢字「社」の例である。4 は元和本と稿本で仮名字母が異なる。

これらを見る限りでは、元和本を等しく稿本が受け継いでいるわけではなく、それぞれの曲による改訂であり、明和本で「こそ」の漢字表記を行う例もみられる。漢字、平仮名の表記に対しての一定の方針がないのかもしれない。

「二」二 清濁について

稿本と明和本では、元和本にはない濁点を付し、清音に対する〈スム〉の発音注記がみられる。清濁は本文解釈に関わるものと、清濁の時代変化に関わるものがある。ここでは〈スム〉注記があることのみ《江口》の例で示しておく。なお、稿本の《江口》の〈スム〉の例はすべて書き入れかと思われるが、ほかでは版行された〈スム〉注記もある。

1 「ならまし」稿本・明和本《江口》一オ2

2 「給ひ候ぞ」稿本、「給ひ候ぞ」明和本《江口》二ウ2

3 「ましますか」稿本、「ましますぞ」明和本《江口》三ウ4

4 「色このみの」稿本・明和本《江口》四ウ1

5 「たそかれに」稿本、「たそかれに」明和本《江口》五オ4

稿本と明和本で同じ発音を示す145であるが、5 は明和本に〈スム〉注記がない。3 の稿本は「そ」を胡粉で消して「か」を書き入れている。

また、稿本「たゞずむ」《江口》五オ5に対する上部の書き入れには、墨で「イ」とあるが、朱で「たちやすむ也 ちやの反た、也 清音也」と二拍目の濁音を清音に改める注記がある。明和本は二拍目の踊り字に〈スム〉注記「たゞずむ」である。清濁の改変に反切での説明を加えていることなどを含めて、清濁については稿を改めたい。

「二」三 マ行の発音注記

バ行とマ行の交替に関しては稿本、明和本ともに発音注記が見られる。中世以来の仮名遣書にある、ハ行で書かれたバ行をマ行に読

むものである。それが稿本で発音注記に採り入れられ、明和本に引き継がれる。漢字に対する振り仮名では、稿本では仮名遣いとしてのハ行で版行した振り仮名「フ」の右にさらに「ム」などのマ行の注記を書き入れていて、明和本ではマ行で付される。なお、稿本には発音注記のない「さふらふぞや」「松風」十二オ7・十三オ2や、朱で「ム」を書き入れた「とふらひて」「松風」八オ5などの例もみられる。

1 「くちずさひ」稿本・明和本《江口》二ウ2・4

2 「うかへむと」稿本・明和本《江口》六オ4

右の例のほか、マ行注記のある語は「かうふる(蒙)・かたふく(傾)・けふり(煙)・さふらふ(候)・たはふれ(戯)・とふらふ(弔)・ねふり(眠)」などである。

「二一四」連声注記

①撥音系連声注記

元和本には振り仮名がないため、連声に関わる注記は一切みられないが、稿本では助詞の「は・を」に撥音が続く場合に連声注記がはばなされている。版行のものと、書き入れのものがあが、区別が容易ではない。とりあえず用例を五十音順に挙げておく。

「は」に続く例…「悪心は」《富士太鼓》九ウ2、「縁は」《桜川》九オ6・《三井寺》十四オ5・《軒端梅》八オ2・《定家葛》四ウ2・九ウ3、「衆人は」《富士太鼓》六オ6、「狂乱は」《柏崎》八ウ1、「絃は」《蟬麻呂》八ウ2、「御対面は」《千手》四オ2、「御本尊は」《百万》十一オ5、「執心は」《佛原》六オ5、「水干は」《二人静》六オ4、「対面は」《千手》三ウ7、「中間は」《佛原》八ウ4、「ふ

しんは」《梅枝》五オ7、「明神は」《班女》四ウ3、「流転は」《江口》八オ6

「を」に続く例…「艶を」《楊貴妃》一オ6、「縁を」《軒端梅》七ウ3、「鬼神を」《軒端梅》七オ1、「鬼門を」《軒端梅》七オ7、「観世音を」《源氏供養》一オ3、「君邊を」《千手》三オ6、「結縁を」《芭蕉》三ウ3、「執心を」《梅枝》五ウ6・六ウ2・八オ7・九オ1、「酒宴を」《千手》七オ4、「所願を」《源氏供養》七オ4、「心を」《梅枝》九オ4、「信心を」《百万》三ウ4、「樽を」《千手》七オ4、「亭を」《定家葛》三オ3、「転変を」《柏崎》十一ウ3、「人身を」《江口》九オ4、「念願を」《源氏供養》三ウ2、「百年を」《源氏供養》六ウ4、「悲願を」《源氏供養》六ウ7、「美人を」《楊貴妃》一オ7、「佛御前を」《佛原》五オ2、「譬喩品を」《軒端梅》五ウ3、「門前を」《軒端梅》五ウ1

また助動詞「ん」からの「やらんを」《三井寺》三ウ5・《柏崎》十ウ3の連声注記例もあるが、連声注記のない「信心を」《百万》十オ7もある。

稿本では、明和本と同様に、漢語への振り仮名は発音注記ではないため、単語内の連声は示されない。たとえば、「安穩」《百万》三ウ7・《富士太鼓》九ウ6、「観音」《浮舟》八オ7、「十二因縁」《江口》八オ6、「尊容」《百万》九オ6、「天王寺」《江口》一オ4・5・《富士太鼓》二ウ7・六オ6、「梅枝》三ウ7などがある。

なお、「天王寺」の《江口》の二例は、ともに「王」の左に朱で「ノウ」と、《梅枝》の例も「王」の振り仮名のさらに右に朱で「ノウ」が書き込まれている。しかし、明和本ではこの朱を採用せず、単語内での連声注記はなされない。

② 促音系連声注記

稿本に促音系連声がみられるのは「前仏は」〔佛原〕八ウ3、
「後仏は」〔佛原〕八ウ3、「日月は」〔蟬麻呂〕十一オ3である。こ
れはいずれも版行ではなく、書き入れであろう。稿本には、明和本
に施される人声音への〈含〉〈ツメル〉の注記がほばないことも促
音系連声注記が多くない理由であるか。

なお、朱で「ツメル」の書き入りが「古者仏身」〔梅枝〕六オ7、
「成佛せず」〔梅枝〕六ウ5の「仏」の左に、「経念佛して」〔松
風〕一ウ6の「佛」の下に、それぞれみられ、この朱は明和本で採
用されている。稿本「富貴」〔三井寺〕十四ウ7には左に墨で「ツ
メル」の書き込みがみられ、明和本では「富貴」とした上で「ツメ
ル」注記もある。また、元和本の「南無釈迦弥陀佛」と「百万」三
ウ3は、稿本では「弥陀」に貼り紙がされ文字がなく、「佛」の左
に「ツメル」があるが、胡粉で消されている。明和本では「南無釈
迦牟尼佛」〔ツメル〕である。

以上のように元和本から明和本を作成するために作られたと考え
られる稿本の状況について確認をした。先にまとめたとおり、稿本
は元和本をもとに漢字に対する片仮名の振り仮名、濁点が導入され
ている。稿本の平仮名に対する発音注記については、書き入れであ
るかどうかが判断しにくいものの、バ行とマ行に関わる語と、助詞
「は・を」に続く連声の場合のみがみられる。ハ行転呼音に関わる
助詞や動詞の送り仮名への発音注記はない。また、明和本にみられ
る「わきまふる」〔江口〕八ウ4、「うしなふ」〔江口〕九オ2など
才段長音に関わる発音注記も見られない。さらには、明和本の特徴

ともいえる人声音に対する〈ツメル〉〈含〉の注記がみられない。
稿本から明和本までには、さらなる改変が行われているのである。

三 仮名遣いの相違

元和本の仮名遣いは当時通行の定家仮名遣いであり、それを国学
の研究成果をもとに所謂「歴史的仮名遣い」に書き換えたのが明和
本である。どの段階で、大きく改められたのかをさぐるために、稿
本の状況を確認した。

「三一」稿本の本文平仮名の仮名遣い

稿本が元和本の仮名遣いを踏襲し、明和本と異なるものについて、
稿本での語例を挙げる。稿本の本文は、ほば元和本と同じであり、
稿本の仮名遣いは元和本の仮名遣いである。

なお、稿本と明和本での相違はないが、両方ともに歴史的仮名遣
いに外れる例としては、「まいる(参)」があげられる。「参る」は
歴史的仮名遣い「まゐる」であるが、「まいる」が定家、禅竹、禅鳳、
元和本、稿本、明和本などで使われる。

① 稿本「お」で明和本「を」のもの

「うちおさめ(討納)」〔富士太鼓〕八オ6、「おかしひ(可笑)」
〔蟬麻呂〕六ウ1・六ウ2・〔柏崎〕六ウ6、「おがみ(拝)」〔野宮〕
一ウ5・〔采女〕一オ3・「おがむ(拝)」〔三井寺〕三ウ6、「お
ぎ(荻)」〔班女〕十オ2、「おぎはら(荻原)」〔芭蕉〕十一オ3、「お
さなき(幼)」〔桜川〕一オ4・三ウ4・四オ2・五オ4・〔三井
寺〕三オ1・〔百万〕一オ3・一オ6・〔富士太鼓〕四オ6、「お
さまり」〔采女〕九ウ1、「おさめし」〔二人静〕六オ2、「おしう

(惜)「《桜川》二ウ5・「おしき(惜)」「《熊野》一ウ2・「班女」十一オ4・「百万」七ウ1・「おしけれど」《熊野》十三ウ3・「おしまざりにしと(惜)」「《江口》三ウ2・「おしまじな」《芭蕉》四ウ2・「おしまぬ」《熊野》十三オ7・「江口」四ウ5・「おしみ」《江口》三オ4・「おしむ」《江口》二オ5・四ウ5《班女》七ウ1・「おしめ共」《三井寺》十オ4・「おつと(夫)」「《梅枝》四ウ1・七オ3・「おとこ(男)」「《井筒》十オ3・「おとなしく」《井筒》七オ1・「おり(折)」「《佛原》五オ2・「おりから(折柄)」「《定家葛》四ウ5・《夕顔》八オ1・「おれる(折)」「《野宮》四ウ1・「神楽おのこ」《住吉詣》三ウ3・「取おさめ」《二人静》五オ5・「ながめおりて」《三井寺》九オ6・「名残おし」《蟬麻呂》七ウ6・「ふしおがむ(伏拝)」「《熊野》八ウ6・「伏おがみ」《夕顔》一ウ2
 ②稿本「を」で明和本「お」のもの

「うちをきがたき(打置難)」「《班女》六ウ5・「聞をくり(送)」「《蟬麻呂》十三ウ2・「たてをき(立置)」「《定家葛》三オ3・三ウ3・「頼めをく(置)」「《住吉詣》七ウ2・「残しをく(置)」「《軒端梅》三ウ1・「乗をくれじ」《玉葛》六オ3・「ばちをと(撥音)」「《蟬麻呂》九オ2・「降をく」《千手》九ウ1・「めしをかれて(召置)」「《佛原》四ウ4・「をひて(於)」「《熊野》二ウ7・《采女》八ウ5・《浮舟》二ウ3・「をき所」《野宮》十ウ6・「をく(置)」「《源氏供養》九オ1・「をき(置)」「《二人静》一オ2・《源氏供養》五オ7・「をきぬ(置)」「《柏崎》八ウ1・「をくる(送)」「《源氏供養》六ウ5・「をくりしに」《百万》六ウ6・「をくりける」《井筒》七オ7・「をくれ(後)」「《野宮》六オ2・「をこつて(起)」「《采女》十二オ3・「をこりて」《梅枝》三オ3・「をして(押)」「《富士太鼓》六

ウ1・「をしなへて(押摩)」「《住吉詣》二ウ7・「をしはかり(推量)」「《千手》五ウ1・「をしひらく(押開)」「《千手》四ウ5・「をしわたらむ(押渡)」「《二人静》七オ3・「をそく(遅)」「《桜川》四ウ2・「をそなはりたる(遅)」「《熊野》十オ4・「をそなはりて」《桜川》四ウ4・「をそはれて(襲)」「《二人静》八オ1・「をそれ(恐)」「《蟬麻呂》四オ5・「をと(音)」「《三井寺》十オ1・《松風》四ウ1・《芭蕉》十一オ6・《梅枝》十ウ3・「をとづる、」《千手》一ウ7・「をとづれ」《三井寺》十ウ4・「をとなひ(喧響)」「《芭蕉》一ウ3・「をどろ(棘)」「《蟬麻呂》八オ6・「をのづから」《三井寺》一ウ2・六オ3・《芭蕉》九ウ5・「をのく(各々)」「《佛原》八ウ1・「をひ風(追風)」「《千手》四ウ5・「をひのほつて(追登)」「《蟬麻呂》六オ6・「をやこ(親子)」「《百万》六オ1・《桜川》六ウ4・「をよぶ(及)」「《采女》九ウ4・「をりぬふ(織縫)」「《浮舟》四ウ6・「をろかなる(愚)」「《芭蕉》六ウ5
 ①②の稿本の仮名遣いは、「お・を」における定家仮名遣いの原理であるアクセント仮名遣いに関わる。①はアクセント体系変化前には、低く始まる低起式の、第二類動詞「拝む・納む・惜しむ・折る」とその複合語と転成名詞、第三類名詞「萩」、第四類名詞「男」とその複合語であり、「お」で表記する。稿本はほぼアクセント体系変化前のアクセントによる仮名遣いで、定家の仮名遣いと同様となる。明和本が歴史的仮名遣いである。

②のうち平安来、高く始まる高起式の、第一類動詞「置く・送る・押す・追ふ・及ぶ」とその複合語、第二類名詞「音」、「をのづから・をのを」などは「を」で表記する。なお、稿本「をく」《源氏供養》五オ7は、「たがひに心ををきもせず」で「置き」と「起き」の掛

詞であるが、上からの「置き」を「をき」で表記する。ここで注目すべきが、アクセント体系変化によって、変化後のアクセント仮名遣いと推定できる「をこつて・をこりて・をそれ・をやこ」がみられることである。「起る」は『仮名文字遣』「おこる」ではあるが、稿本の振り仮名例の「発る」も含め、アクセント体系変化後のアクセント仮名遣いである。第二類動詞からの転成名詞「恐れ」は、『仮名文字遣』「をそれ」で一致する。「をやこ」は「三十三」で述べる稿本にみられるアクセント仮名遣いの例外としては、①の「おつと（夫）」、「神楽おのこ」がある。

稿本「おつと（夫）」は「を（男）＋ひと（人）」で同じ語構成の「をうつ」が平安HHHであり、これもアクセント仮名遣い、歴史的仮名遣いでも「をつと」である。しかし「おつと」で現れる。これは、使用頻度の高い「おとこ」の表記がLLLLからHHHに変わっても「をとこ」と書かれることがなく、「おとこ」の仮名遣いが保たれることに引かれて、『仮名文字遣』において、アクセント体系変化前からHHHの「をのこ」に「おのこ」とのゆれがみられるのと同様であろう。意味の近い「おとこ」の表記に倣ったと考えられる。

③稿本ワ行「ゐゑを」で明和本ハ行「ひへほ」のもの

「そこゐ（底方）」《井筒》六ウ6、「ゆくゑ（行衛）」《柏崎》七オ3・《千手》二オ5・《班女》五ウ2・《蟬麻呂》二オ6、「とをき（遠）」《松風》四ウ7、「とをらば（通）」《源氏供養》五オ1、「なを（猶）」《浮舟》一ウ4・八ウ3・《江口》八ウ3・《柏崎》十二オ6・《桜川》十四ウ2・《玉葛》二ウ2・五ウ1・六ウ3・《軒端梅》三ウ4・九オ6・《二人静》一ウ7・《佛原》八オ7・《夕顔》

三オ2・《楊貴妃》七ウ2、「なをざり（等閑）」《住吉詣》七ウ1ハ行転呼音に関わるものでは、ほぼ明和本で歴史的仮名遣いに変更している。③は稿本でワ行、明和本が歴史的仮名遣いハ行である。「そこゐ」は流布本系『仮名文字遣』では「底井」と把らえ「そこゐ」とする。「ゆくゑ」は『下官集』『仮名文字遣』も同様であるが、「ゆくすゑ」との意味の近さが「ゆくゑ」を類推させたのであろう。語中の「ほ」を「を」とする例では、「なを（猶）」は定家の『案秘』にみられ、「とをき（遠）」「なをざり（等閑）」は『仮名文字遣』と同様で中世の仮名遣いともいえる。「とをらば（通）」は『仮名文字遣』には、「とおる・とほる」の両例があるがこれには合わず、語中の「ヲ」を「を」にする中世の仮名遣いといえよう。

④稿本ワ行で明和本ア行のもの

「御立ゑほし（烏帽子）」《松風》十一オ4、「ゑほし（烏帽子）」《百万》三オ3

稿本「ゑほし」は、流布本系『仮名文字遣』に「えほし」「ゑほし」の両例がみられる。「御立ゑほし」の振り仮名は書き入れである。

⑤稿本ハ行「はひへほ」で明和本ワ行「わゐゑを」のもの

「足よはぐるま（足弱車）」《熊野》七オ7・《定家葛》十一ウ4・「足よは車（舘車）」《蟬麻呂》二オ2、「浦は（浦回）」《住吉詣》二ウ3・五オ7・八ウ7・《松風》十三ウ3、「御ことほり」《柏崎》四ウ3・《千手》六オ4、「心よはき（弱）」《熊野》五オ2・七オ1、「ことほり（理）」《浮舟》六ウ7・《江口》四オ5・6・《芭蕉》六ウ7・十ウ7・《班女》五オ6・《松風》十一ウ3・《熊野》十一ウ7・《楊貴妃》四ウ3、「さはがしき（騒）」《二人静》八オ6・八ウ5、「立さはげ」《松風》四ウ1、「よはからし（弱）」《芭蕉》

十二オ5、「よはるなる(弱)」「定家葛」七オ2、「うなひこ(髻髪子)」「井筒」六ウ4、「ゆへ(故)」「三井寺」十二ウ3・十四ウ4・「井筒」四オ7・「富士太鼓」八オ1、「うへ(植)給ふ」《軒端梅》三オ3、「みなれざは(水馴棹)」「玉葛」二オ5、「なるは(鳴尾)」「松風」五オ7

稿本のハ行を明和本で歴史的仮名遣いのワ行表記にしたものである。「ことわり」は「仮名文字遣」に例がある。「浦は」には、「浦半」《住吉詣》二ウ5もあり、入りくんだ地形の意識ではなく、浦の中ごろと意識されたのであろうか。なお、《松風》では「浦は」の「は」を胡粉で塗り、「わ」を書き入れたとみられる。

活用語の語中の「ワ」はハ行で書くという意識が働いたか、「弱し・弱る」「騒ぐ」が稿本では「は」である。「うなひこ」は、流布本系『仮名文字遣』に「うなひこ」「うなぬこ」の両掲載である。稿本の「ゆへ(故)」「うへ(植)」は「下官集」に用例がみられ、定家の仮名遣いといえる。「なるは(鳴尾)」「松風」には「ほ」に振り仮名「ヲ」と「を」の書き入れがある。

⑥稿本ハ行「ひふへ」で明和本ア行「いうえ」のもの

「おかしひ(可笑)」《蟬麻呂》六ウ1・2・《柏崎》六ウ6、「おひ(老)」「熊野」五オ2、「おひらく(老)」「三井寺」十ウ5、「かひて(書)」「二人静」二ウ5・四オ1、「きなひて(着)」「柏崎」十一オ1、「きひて(聞)」「柏崎」四オ4、「ふひて(吹)」「桜川」十一オ1、「をひて(於)」「熊野」二ウ7・《采女》八ウ5・《浮舟》二ウ3、「おほふして(多)」「熊野」八オ1、「かふ(斯)」「松風」七オ7、「暗ふて」《蟬麻呂》一ウ2・《千手》十オ3、「頼見すく(なふ)」「熊野」三オ7、「ちかふ(近)」「熊野」十一オ1、「なつ

かしふ(懷)」「松風」八ウ4、「なふて(無)」「井筒」十オ6、「はげしふ(激)」「浮舟」七ウ2、「はやふ(早)」「松風」十オ5、「ほどなふ(程無)」「松風」一ウ7、「参らふずる」《班女》三ウ6・《熊野》十ウ7・《定家葛》五ウ1、「申さふずる」《熊野》三ウ3・《柏崎》二オ7、「まふけ(設)」「采女》九オ1・《三井寺》八オ1、「まふで(詣)」「玉葛》一オ4・五オ4・七オ1、「さかへ(栄)」「千手》六ウ1、「さへまさる(冴勝)」「柏崎》二オ3

以上についても活用に関わるため、稿本ではハ行で表記したものである。稿本では、ヤ行動詞「老ゆ」からの語を「おひ」「おひらく」とする。『下官集』に「おひぬれは おいぬれは又常の事也」とあり、意味的には「生ふ」と「老ゆ」との両語の併記をした可能性もあろうが、「よぬのま よひ又常事也 通用也」としているので、定家は「おいぬれは」と「おひぬれは」を通用すると考えていたのだらう。『仮名文字遣』では「老」のゆれとして「おひぬれは おいぬれはとも」とする。稿本が「老」を「おひ」とすることもこれによるのであろう。

稿本は、イ音便を「ひ」で表記するが、多くに朱で「イ」の書き入れがある。例えば、「おかしひ(可笑)」の《蟬麻呂》は二例とも「ひ」の右に「い」の書き入れがあり、「かひて(書)」の二例も青で「き」とし、朱で「イ」を書き入れている。「きなひて(着成)」「ふひて(吹)」には朱で「い」の書き入れがある。「をひて(於)」には朱で「おき」とした上で、「き」に「イ」を注記する。『仮名文字遣』には「をひて」を示す本が多いが「をいて」もみられる。明和本は歴史的仮名遣い「おいて」である。

稿本は、ウ音便を「ふ」とし、助動詞「う」を「参らふずる」「申

さふずる」と「ふ」で表記する。形容詞のウ音便の「ふ」には「く」や「う」が朱や青で書き入れられている。「まふけ」は活用語尾ではないが、活用語由来は「ふ」で表記する意識が働いたか。ヤ行動詞「栄ゆ」「冴ゆ」の連用形の「エ」を「へ」で表記し、ここでも活用語尾はハ行という意識がみられる。

⑦ 稿本「ほ」で明和本「ふ」のもの

「おほせ候て（仰）」《柏崎》一オ7、「おほせ（仰）」《千手》八オ4・《富士太鼓》四ウ3・《百万》五オ1、「おほ宮（大宮）」《玉葛》一オ5

稿本が歴史的仮名遣いで明和本が異なるのが⑦である。「おほせ（仰）」は動詞、転成名詞を含めて稿本では「おほせ」「仰」、明和本ではすべて「おふせ」「仰」である。おそらく明和本「おふせ」は、同じ漢字「仰」で表記する「あふぐ」の仮名遣いとの類推で「おふせ」としているのではないかと思われる。なお、「あふぐ（仰）」については、稿本「仰がざるべき」《住吉詣》三オ3を、明和本では「あふがざるべき」としている。

また、明和本「おふ宮」は、稿本「なに。おほ宮」の「ほ」を朱で消して「ふ」を書き入れし、これを明和本では、「おふ宮」として採用し、さらに「ふ」に発音注記「ヲ」が付される。明和本は「名に負ふ」と「おほ宮」の掛け詞の部分を、上からの文脈で「おふ（負）」で表記したものである。

⑧ 稿本「う」で明和本「ふ」のもの

「たうとや（尊）」《熊野》十四オ1

これは、「う」に朱で「ふ」の書き入れがあり、明和本はこれと同じである。『仮名文字遣』では「たふとし」である。

⑨ 稿本が「え」で明和本が「へ」のもの

「たえぬ（堪）」《千手》二ウ2

稿本では「え」に「へ」の書き入れがみられ、明和本では「たへぬ」で、「エ」の発音注記がある。『下官集』には「不堪 たへす」がある。

⑩ 稿本が「え」で明和本が「ゑ」のもの

「つえ（杖）」《蟬麻呂》四ウ5・五オ2

『仮名文字遣』は文明十一年本「つえ」のみだが、流布本系は「つえ」「つゑ」の両様である。

⑪ 稿本の振り仮名の仮名遣い

元和本にはない漢字への振り仮名について、ここでも稿本と明和本とで表記の異なる語例を稿本の例で挙げる。おおむね稿本は通行の定家仮名遣いで、明和本の振り仮名は歴史的仮名遣いといえる。

稿本と明和本とが同じで、歴史的仮名遣いに合わない例に「鬼」がある。稿本「鬼の」《夕顔》四オ6の振り仮名に青で「オ」を書き入れているが、明和本も「鬼」で、歴史的仮名遣いに合わない。「鬼」は第三類名詞でLLからHLに変化することから、流布本系の『仮名文字遣』には「おに をに共」とあり、稿本は定家仮名遣いとしての訂正をしている可能性もある。なお、「芭蕉」は《芭蕉》の例はすべて「バセヲ」で稿本、明和本ともゆれがないが、稿本《井筒》十ウ2に「ヲ」を消して「オ」を書き入れた例がある。

なお、稿本、明和本で相違がない「いつはり」《定家葛》四オ2・7は、明和本では「いつはり」である。稿本「いつはり給ふ」《富士太鼓》六オ2と、平仮名で「わ」を書き入れた例がみられ、この

個所は明和本では「偽りますや」である。

稿本がほぼ定家仮名遣いであるものを、明和本がほぼ歴史的仮名遣いに改めているのが①②である。

①稿本が「オ」で明和本が「ヲ」のもの

「青柳」《松川》十四ウ2、「桶」《松風》五ウ3、「治め」《蟬麻呂》二ウ7、「男」《富士太鼓》八オ5・《浮舟》七ウ3、「男山」《夕顔》一オ3・《富士太鼓》三ウ4、「尾上」《玉葛》七オ2・《三井寺》九ウ5、「尾花」《佛原》七オ2、「惜まぬ」《江口》三ウ5・「惜む」《江口》三オ3・7・四ウ6・《三井寺》十オ6・《二人静》八ウ4、「折」《松風》九ウ7、「折から」《軒端梅》五ウ7・《蟬麻呂》八ウ5・《定家葛》二ウ5・《松川》七オ2・《芭蕉》六オ4・《佛原》四オ3、「折節」《井筒》三オ5・《芭蕉》一ウ2・《源氏供養》三ウ4・四ウ2・《柏崎》四オ2・《梅枝》二オ3・《佛原》五ウ4・《折ふし》《班女》十二オ5・《柏崎》十ウ5・《住吉詣》四オ6、「折く」《蟬麻呂》九ウ1・《班女》十一オ3・《采女》九ウ5、「口惜」《千手》五ウ4、「まめ男」《井筒》七オ2、「昔男」《井筒》四ウ2・《むかし男》《井筒》九オ7・十オ2

本文仮名遣いと同様、アクセント体系変化前の低起式による仮名遣いで、第二類動詞の「治む・惜しむ」、第二類形容詞「惜し」、三拍第四類「男」とその複合語と、体系変化後も低いアクセントである二拍第四類名詞「折」、第五類「桶」、一拍第三類「尾」とその複合語などである。稿本は本文と同じ定家仮名遣いである。

稿本では「折」には概ね「オリ」と振られるが、《松風》九ウ7・《梅枝》九ウ3は振り仮名「オ」を「ヲ」に直しているように見える。

②稿本が「ヲ」で明和本が「オ」のもの

「足音」《蟬麻呂》九オ6、「御音信」《松風》十三オ4、「書置し」《夕顔》二ウ5、「河音」《玉葛》四オ3、「かへり見置て」《蟬麻呂》十三ウ2、「観世音」《源氏供養》一オ3、「観音」《熊野》八ウ6・十四オ2、「捨置」《蟬麻呂》一ウ6・二ウ6、「定め置」《楊貴妃》九オ5、「たて置れたる」《定家葛》二ウ6、「留め置て」《熊野》一オ3、「残し置」《松風》十一オ5、「ひたち帯」《松川》十三ウ3、「水音」《芭蕉》六オ2、「見置て」《富士太鼓》十ウ4・4・《読置》《軒端梅》六オ5、「置たる」《千手》九オ3・《置れず》《松風》十一ウ7・《置るべき》《梅枝》二ウ2、「掟て」《熊野》四ウ5、「置所」《班女》五ウ1・《柏崎》十二オ1・《置どころ》《芭蕉》十一オ7、「起伏」《班女》七オ3、「送り」《三井寺》一オ4・《送る》《百万》八オ3、「発る」《梅枝》八ウ2、「押へつゝ」《蟬麻呂》五ウ4、「押のけて」《楊貴妃》四オ1、「仰」《班女》六オ6・六ウ1、「遅く」《二人静》三ウ3・5・《遅し》《熊野》十一ウ3、「愛宕」《熊野》九オ3、「落」《三井寺》十一オ2、「音」《芭蕉》十一ウ7・《佛原》五オ4・《千手》二ウ2・《班女》二ウ6・七ウ3・《軒端梅》五ウ5・《二人静》八オ6・《住吉詣》二ウ2・三ウ4・《野宮》九オ2・《蟬麻呂》十二オ5・《松風》二ウ3・十四オ2・《音信》《柏崎》三ウ5・《班女》八ウ7・《音づれ》《芭蕉》十一オ2・《松風》十オ7、「弟」《蟬麻呂》九ウ3・十オ1、「音羽」《熊野》七ウ3・《源氏供養》一オ7、「荊棘」《百万》三オ2、「驚かぬ」《江口》六ウ2・《梅枝》五ウ4、「衰ふる」《三井寺》十四オ2、「追出さばや」《班女》一ウ3、「追手」《二人静》八ウ6・《柏崎》三オ5、「面白や」《源氏供養》九ウ4、「面」《班

女》十オ6、「思」《班女》六ウ6、「思ひ子」《桜川》六オ7、「趣候」《梅枝》一オ6、「御とふらひの」《梅枝》七ウ4

このうちアクセント体系変化前から高起式アクセントで、アクセント仮名遣いが「ヲ」である第一類動詞「置く・送る・押す・追ふ」、第一類形容詞「遅し」とその転成語と複合語、二拍第二類「音」、平安日ハの「荊棘」については、稿本は定家仮名遣い、明和本は歴史的仮名遣いである。その他、稿本「愛宕」は、「仮名文字遣」に「をたぎ」の例がある。

アクセント体系変化により、低起式から高起式に変化した第二類動詞「発る・驚く・衰ふ」については、稿本は変化後のアクセント仮名遣いともいえる。第四類「弟」も同様で「し」から「日」へ変化する語で、「仮名文字遣」に「をと、おとう」とときは「お也」とある。

「ひたち帯」については、流布本系「仮名文字遣」の「おひひたちをひのときはを也」に合致している。

「面白ふ」「面」「思ひ」は、稿本の他の個所では「お」「オ」で表記されていて、②の例のみが「ヲ」の例である。《班女》の例が多い。なお、「落」はいずれのアクセント仮名遣いにも合わない。

③稿本がワ行で明和本がハ行のもの

「委く」《梅枝》四ウ5、「行衛」《柏崎》十四オ3・《百万》六オ4、「遠き」《梅枝》五オ1・《桜川》九オ7・九ウ3他、「遠江」《熊野》一ウ3、「遠山」《松風》十三ウ2、「猶」《芭蕉》五ウ6・《佛原》六オ4・《梅枝》五オ7他

④稿本がハ行で明和本がワ行のもの

「故」《三井寺》十四ウ2・《蟬麻呂》三オ6・《柏崎》七ウ1他、

「棹」《江口》八オ2・《玉葛》二ウ6

⑤稿本がア行で明和本がハ行のもの

「買とりて」《桜川》一オ5、「通路」《松風》二ウ4、「今宵」《三井寺》三オ4、「盲まして」《蟬麻呂》一オ7

③④は稿本が中世の仮名遣いで、明和本が歴史的仮名遣いの例である。③の「委く」は例外で、他は「委く」《井筒》三ウ6・《井筒》五ウ3・《二人静》三オ3・《柏崎》四オ3・《采女》三オ3である。また、「遠江」は「ウ」に朱で「フ」の訂正がある。他の語例は稿本文と同様の仮名遣いといえる。

⑤は稿本の振り仮名が発音表記になっている例で、「買とりて」「通路」は「イ」をさらに「ヒ」に直している。「今宵」「三井寺」は、朱で「宵」を消し「夜」の書き入れがある。《三井寺》五オ7・七ウ1・十四オ6他は振り仮名「コヨヒ」であるが、「夜」の書き入れはあるが、明和本に採択されず「今宵」のままである。稿本の「今宵」《芭蕉》十二オ2にも朱で「夜」が書き入れられている。「盲まして」《蟬麻呂》は元和本が「しひましくて」で稿本と明和本が漢字の例である。稿本の発音注記を本文同様の仮名遣いに改めようとする書き入れがみられる。

「三三」稿本における仮名遣いのゆれ

「お・を」に関わる稿本の仮名遣いのゆれは、「起伏・親子・驚く・衰ふ・赴く・面白し・面・思」の例などがみられる。「起伏」以外のゆれは、アクセント体系変化により仮名遣いが変わる語である。

①「起伏」

1 「おきふし」元和本・稿本・明和本《仏原》四ウ6・《松風》十

二オ1

「起臥」稿本・明和本《芭蕉》十一ウ7・《蟬麻呂》十二ウ1

2 「起伏」稿本「起伏」明和本《班女》七オ3

アクセント体系変化を経ても低起式である「起伏」は『和字大観抄』LHLで、現代京都もLHLで、『仮名文字遣』も「おきふし」である。ほぼ稿本も明和本と同様だが2が異なり、この理由はアクセント仮名遣いからも説明できない。

②「親子」

1 「をやこ」(元和本・稿本)、「おやこ」(明和本)《桜川》六ウ4・

《百万》六オ1

2 「親子」(元和本)、「親子」(稿本・明和本)《桜川》十五ウ3・

十六ウ2・《百万》三オ6・十オ1・《三井寺》四オ2・十四オ

7・十四ウ4・6

3 「をやこ」(元和本)、「おやこ」(稿本・明和本)《百万》二ウ1

《桜川》十五ウ3では、振り仮名「ヤヤコ」を「オヤコ」に変更している。「親」については、「おや」《桜川》七ウ1、《三井寺》四オ4・十三ウ6・十四オ4で、元和本、稿本、明和本でゆれがない。

「親・親子」については『仮名文字遣』にゆれがみられる。諸本を詳しくみると、文安四(一四四七)年東京大学本、文明十一(一四七九)年東京大学本、文明十二(一四八〇)年京都大学本、明応四(一四九五)年橋本進吉旧藏本、永祿九(一五六六)年東京大学本は、「をや(親)」を立項し、「おやこの時はお」とする。一方、流布本系である文祿四(一五九五)年陽明文庫本、国会図書館慶長版本では「をやこ」を立項し、「おやの時はお」とする。いわゆる定家仮名遣書

でのゆれがみられるのである。

アクセントから考えれば、「親」は第三類で定家時代はLし、その後HLに変化するので、比較的古い『仮名文字遣』に「をや」が立項されている。「おやこ」は「親」が第三類、「子」が第一類の複合語で、金田一語類では第五類、LHLからHLと変化したと考えると「をやこ」がアクセント仮名遣いの可能性がある。しかし、「親子」はアクセント例のある近世以降、低起式で現在にいたることをみれば、「をや」「おやこ」がアクセント体系変化後の京都アクセントを反映したアクセント仮名遣いといえる。「をや」「おやこ」は流布本系ではない『仮名文字遣』での表記で、使用頻度の高い「親」は流布本系で「おや」として採用される。体系変化後、新たに「親」を前部に持つ語として、HLを反映した「をやこ」にも可能性があるか。

元和本では、流布本系『仮名文字遣』同様の「おや」「をやこ」が使われており、稿本では3に元和本と異なる「おやこ」への変更例がみられた。これについては、依拠した仮名遣書がどのようなものであったのかも検討していかなければならない。

③「哀ふ」

1 「おとろへは」元和本、「おとろへば」稿本・明和本《桜川》七

オ7

2 「哀ふる」稿本、「哀ふる」明和本《三井寺》十四オ2

「哀ふ」の転成名詞は稿本「哀へ」、明和本「哀へ」《千手》六ウ6・《柏崎》十五オ2で「オ」表記である。『仮名文字遣』は「おとろへおとろへ共」など、動詞と転成名詞で語頭「お」の表記にはゆれがない。

④「驚く」

1 「おとろく」元和本、「おどろく」稿本・明和本《三井寺》九オ

3

「驚く」稿本・明和本《野宮》六オ1・《柏崎》十一ウ5

「驚かむ」稿本・明和本《佛原》五ウ3

2 「驚かぬ」稿本、「驚かぬ」明和本《江口》六ウ2・《梅枝》五ウ4

『仮名文字遣』は「おとろく」で、転成名詞についての記述はない。

1の稿本はこれと同じである。2の稿本の振り仮名「ヲトロかぬ」は、アクセント体系変化後の高起式アクセントによる仮名遣いの可能性があるが、振り仮名「ヲ」が朱で「オ」に変更されている。規範とした仮名遣書に「おどろく」と「をどろく」とのゆれがあったのかもしれない。

⑤「赴く」

1 「趣申て」稿本・明和本《千手》四オ6

2 「趣候」稿本・「趣候」明和本《梅枝》一オ6

『仮名文字遣』では文安四年本以下「をむき」が示され、文安四年本以外には、「おもむく時はお也」の記述もみられる。動詞例ではあるが、体系変化後のアクセント仮名遣いとのゆれがみられる例である。

四 おわりに

明和本の稿本とみられる『爐雪集』『紅爐點雪集』では、本文と振り仮名に元和本の定家仮名遣いを踏襲している。これがだれによっていつ作られたのかもこれからの検討課題であるが、この定家

仮名遣いは、現存する『仮名文字遣』の流布本系に近いものの、第二類動詞にアクセント体系変化後のアクセントに拠った表記がみられる点、どのような仮名遣書に倣ったのかも検討しなければならぬ。元和本から受け継いだ例でもあり、元和本自体の仮名遣いの実態についても再検討が必要である。

稿本の、本文と同様の仮名遣いで漢字に振り仮名を付すという方法は、明和本での本文と、漢字振り仮名への所謂「歴史的仮名遣い」の採用につながった。一方で、明和本での本文平仮名への発音を注記する態度は、漢字振り仮名には及ばなかったことになる。稿本の振り仮名には発音注記といえる「買とりて」「通路」「今宵」「首ましまして」などもみられたが、明和本での漢字への振り仮名を発音注記にするには至らなかった。

稿本には、版行されたものもあるが、その後に書き入れられた清音注記の〈スム〉、ハ行の表記にバ行とマ行の交替を示す〈ミ・ム・メ〉の注記や連声注記がみられる。しかしながら、明和本にみられる入声音への〈含〉〈ツメル〉の詳細な注記や、和語動詞に対する才段長音の発音やハ行転呼音への注記はなされていない。

明和本は、稿本にはない、動詞に対する才段長音の注記、例えば「たまふ」に「タモヲ」と振る注記がなされる。これは、謡が守ってきた才段長音開合の区別をやめ、当時の日常の発音とは異なる新たな読み方、すなわち古典の読み方を示したことになる。ハ行転呼音とともに、現在の古典教育で行われる音読法に繋がるともいえる。それと同時に、古典作品を「歴史的仮名遣い」で表記することも行ったのである。それまでの謡本の書流は継承しながら、国学の成果による仮名遣いに改変したのである。現代の古典教育では、歴史

的仮名遣いで書かれた文章をどう音読するのが問題になる。音読にあたり、謡での発音が参考にされたと言われているが、その実態は明確にはされていない。明和本の仮名遣いと発音注記がその解明の端緒になるのである。

しかし、この改変はまだ稿本にはみられない。明和本に至る仮名遣いや注記をいつのころに取り込んだのかを探るために、稿本と近い石畳艶出模様紺表紙一番綴謡本の表記についていずれ確認してみたい。

注(1) 坂本清恵(二〇二三)「謡と定家仮名遣い」『国語と国文学』一〇〇・三

(2) 表章(一九六五)『鴻山文庫本の研究—謡本の部—』わんや書店 二五〇頁～二五二頁

(3) 落合博志(二〇一四)「元和卯月本」『観世元章の世界』檜書店

(4) 中尾薫(二〇〇六)「明和改正謡本と加藤枝直」『謡曲改正草案・幀の再検討から—』『芸能史研究』一七二(一九九四七頁) 芸能史研究会

(5) 坂本清恵(二〇二二)「オ段長音の開合区別 謡曲はいづ、なぜ、それを断念したのか」『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集』第一冊

(6) 坂本清恵(二〇二二)「明和改正謡本における舌内入声音と連声の注記」『国文目白』六一

(7) 落合博志(二〇〇五)「観世元章—明和改正謡本の稿本など」『國文学解釈と教材の研究』五〇(七)

(8) 外題なしの一点は、未補修のために未撮影とのことである。

(9) 大森雅子(一九八三)「明和本に関する一考察—その諸版をめぐって—」『観世』五〇(五)

(10) 注(7)による。

(11) 寛永二年の奥書を持つ日本女子大学蔵『西三條家仮名遣書』と外題のある「仮名遣近道」に仮名遣いと発音についての記述がある。

一・ふを・みにつかふ事おほくはなきか

弔 浮 侍

・とふらひ ・うかふ ・さふらふ

此類也 ぶとにこりてよむ事も有故歟

一・ひを・みにつかふ事多はなきか

・うかひ 神南 ・神なひ ・えらひ

此類也 濁りてよむ事も有ゆへ歟

一・へを・めに遣ふ事おほくはなきか

・うかへ 浮 押 並 女 郎 花

・をしなへて ・をみなへし

【四才】

(12) 坂本清恵(二〇〇七)「ゆれる〈をのこ〉とゆれない〈おとこ〉—『仮名文字遣』諸本とアクセントの体系変化」『古典語研究の焦点』武蔵野

書院

(13) 定家筆の『古今和歌集』伊達本、嘉禄本では「おいぬれは(老)」としている。『明月記』では「をい(追) いれられたる」(建暦元年十一月十七日)などに「ひ」ではなく「い」での表記がみられる。

(14) 『千手』四才3・『住吉詣』一才5 など。

(15) 高橋悠介(二〇一四)「観世元章手沢・石畳艶出模様紺表紙一番綴謡本の周辺」『観世元章の世界』檜書店

【付記】

本稿をなすにあたり、ご所蔵の『爐雪集』『紅爐點雪集』の閲覧および写真掲載のご許可をくださった観世宗家、閲覧の労をお取りいただいた観世文庫、高橋悠介氏、横山太郎氏に厚く御礼申し上げます。